

追放された最強聖女は、

街でスローライフを送りたい！

ジュリアン

アンリの従者。
生真面目な性格で、
自身も男爵位を持つ。

フェリシア

王宮付き魔導士。
年齢不詳で酒豪の
クールビューティ。

アンリ

若き伯爵。孤児として
リーナやシャルルと
同じ施設で育ったが、
五年前、お金持ちの父親に
引き取られた。

シャルル

聖剣に選ばれし勇者。
リーナやアンリとは
幼馴染で、兄弟のように
育ったが——？

ミケちゃん

カナエ

異世界から来た謎の女性。
新たな治癒師として
シャルルのパーティに
加入した。

アデル&サイオン

勇者パーティの剣士たち。
リーナを置き去りにして
シャルルと共に旅立つ。

みーちゃん

リーナ

聖女と呼ばれる治癒師。
幼馴染の勇者シャルルに
いきなり追放されてしまう。
前世の記憶を持つ、
元日本人。

目次

プロローグ	聖女です。寝耳に水の濡れ衣 <small>ぎぬ</small> で追放されました	7
第一章	聖女は街で、自立します！	20
第二章	幼馴染 <small>おせなじみ</small> は暴走します	58
第三章	図書館とドラゴンと猫	118
第四章	再会	178
幕間	カナエ・タカハシ	202
第五章	深部へ	217
第六章	おわりとはじまり	261
エピローグ	王都へ	290

プロローグ 聖女です。寝耳に水の濡れ衣で追放されました

「治癒師リーナ、君をパーティから追放する」

寝耳に水という言葉葉を表現するのにぴったりの状況があるならば、このときの状況はまさにそれだった。

幼馴染にしてパーティの仲間でもある、勇者シャルルからそう宣言されたのは、滞在中の街で高熱を出し、ふらふらになっていたときのこと。

パーティの皆に迷惑をかけないように宿屋にひきこもり、自分で自分に癒しの魔法をかけて、魔力切れで倒れては、また起きて魔法をかけて……を繰り返していた。

十日経って、ようやくリゾットが喉を通るまで回復した頃、シャルルは私に指を突きつけ、いきなり追放を宣言したのだ。

「はい？」

ベッドに身を横たえたまま、スプーンを啜っていた私は、間抜けな声を出した。

追放？ 私が？ どうして？ 疑問符が頭の中にくっつきも浮かぶ。

「……とりあえず、座る？」

その問いかけにシャルルも、他の仲間も答えてくれない。
私は金色の髪に青色の瞳をした幼馴染の勇者を見つめた。

シャルルは一つ年上の十九歳。私と同じ施設で育った彼は、聖剣に選ばれて勇者になり、旅に出て今年で四年になる。

年上のくせにどこか頼りないところのある彼を、私は弟のように思っていた。

幼馴染というより大事な家族だど。

——それなのに、シャルルは一体何を言っているのだろうか。

私達が王都の東にある、このアングスという名の都市についたのは、ちょうどひと月前。

我がハーティア王国の現国王から「アングスの地下のダンジョンに不穏な動きをする魔物がいるから、探ってくるように」との命令を受けてのことだった。

ダンジョンに潜って半月ほどは、順調に探索を進めていた。

時折不穏な気配を感じつつも、国王陛下が言う「不穏な動きをする魔物」には出会っていなかった。

ダンジョン内部には先遣隊が設置した「人が近づくと自動的に灯る装置」がある。

ところが地下六階層になると装置は全く作動しない……いや、装置自体がなかったのだ。

それはつまり、この階層には誰も到達したことがない、ということだった。

「俺達がここまで到達した初めての人間！ ってことだよな。さすが俺達だぜ！」

頑健な体をした赤毛の剣士サイオンが口笛を吹いた。

私はちよつと顔をしかめる。

「サイオン、やめて。口笛は魔物を引き寄せるかもしれないから」

サイオンは頼りになる腕のいい剣士だけど、少し迂闊なところがある。

地下に潜る魔物は高い音を警告音ととらえて攻撃してくる傾向があるから、ダンジョン内での口笛は禁物。

それにサイオンが怪我をしたら治療するのは治癒師である私だ。それが自分の役目だから別に構わないけれど、無駄に怪我はさせたくないから、私は注意をした。

「……ちつ」

いつもなら私のお小言を笑い飛ばすのに、サイオンは小さく舌打ちをした。それから、少し不満げに口を尖らせて女剣士のアデルと視線を交わす。

違和感を覚えた私が、二人にどうしたのかと尋ねる前に、凜とした女性の声が響いた。

「灯りよ！」

魔導士フェリシアの呪文で光が出現し、苔むしたダンジョンの内部がまるで真昼のように照らされた。

「進もう」

シャルルが促し、私達は彼のあとに続く。

けれど一步を踏み出したところで、視界の端にギラリと光るものをとらえた。

——赤く光る、何か。

反射的に視線を走らせたけど、シャルルはまだ気づいていない。

勇者の護衛をするべきサイオンは、私の背後でアデルと何事か囁き合っている。

「シャルル、危ないッ!!」

私は叫んで、咄嗟にシャルルをかばった。

「……! リーナッ!」

背中に何かが刺さったような熱さを感じ、私は悲鳴をあげた。それから先は記憶にない。

目覚めたとき、私は宿屋のベッドに寝かされていて、冒険者ギルドから派遣された医師から「魔物の毒にやられたようだから安静にしなさい」と言い渡された。

幸い致死性のもではなかったけれど、私は何日も寝込むことになり、他の四人は私を置いてダンジョンに潜っていた。

治癒師がいないのにダンジョンに行くのは危険ではないか、と夢うつつに思ったけれど、たまたまギルドにいたフリーの治癒師がシャルルに同行したらしい。

早く、元気にならなくちゃ。

みんなを助けるために、元気にならなくちゃ。

そう思いながら十日間を過ごし、ようやく動けるようになった。それなのに……

「追放って、どうということ?」

「君が役立たずだからだよ。リーナ」

海の青より美しいと称えられた瞳でシャルルは私を見た。呆然とする私に構わず、不自然なほど落ち着いたまま、シャルルは続けた。

「君は楽がしたくて、わざと、あの魔物に襲われたふりをしたんだろう?」

「え?」

私は間拔けな声を出した。

サイオンが楽しそうに言う。

「俺達が泥にまみれて探索している間、一人だけ宿屋でぐっすり休んで。いい身分だな! 思えば、このダンジョンに来るのにリーナは否定的だった」

「それは、だって、先遣隊のみんなが怪我をして帰ってきて……、危険だと思ったから」

あまりの衝撃に言葉が上手く見つからず、何だか言い訳がましく響いてしまっ、それが悔しい。サイオンが私をせせら笑うように見ていた。アデルもだ。

その後ろには無表情のフェリシアと、見知らぬ可憐な女性がいる。

「よく言うぜ。治癒師のくせに、俺達を治療するのが嫌だったんだろう?」

サイオンが悪態をつく。

「ど、どうこと?」

「前衛のあたし達だけが戦って、後衛のあなたは楽しんでばかり。その上、怪我をしたあたし達を治療するのも嫌がるなんて、あんた本当に治癒師? 少し腕がいいから『聖女』なんて呼ばれ

て……いい気になってるんでしょ」

私はアデルの言葉に絶句した。

確かに私は治癒師だけど、それ以外にもたくさん仕事をしてきたつもりだ。人を癒すのだけが私の仕事じゃない。

ダンジョン内で皆が休憩できるスペースを確保して、魔法で浄化したり、魔物の出現率が低くなるよう、皆の道具に特殊効果を付与したり。

アデルが狼タイプの魔物に襲われて、腕を切断する危機に瀕したとき、治療したのも私だ。そのあと、私は疲労で倒れて……

あのときアデルは泣きながら、こう言ってくれたのに。

ありがとう、ほんとにリーナは聖女みたいだね、って。

「治癒師による治療は、怪我をした本人のエネルギーも消費する。だから無闇に使うべきじゃないって説明してきたよね？ それに、怪我をしてもどうせ治るって考えは、皆が強くなるためにもよくないから、できる限りやめようって……」

「それはリーナ、君が力不足だからだろうか？」

私の言葉をシャルルが止めた。シャルルはずっと微笑みをたたえている。

「僕達を治療するとすぐ疲れてしまって、嫌だからだ」

「そんなことあるわけない！ シャルル、少し落ち着いて考えてよ。私がそんなこと思うわけないって、シャルルならわかるでしょう？ ずっと一緒にいたじゃない！」

必死に訴える私を、シャルルはどこまでも冷たい目で見てきた。

「やめてくれないか。その家族ヅラを」

「かぞく、づら？」

あまりの口調の冷たさに、私は凍えそうな気持ちで幼馴染を見た。

彼はいつもみたいににっこり笑って、さらに続けた。

「うんざりしていたんだ。リーナ。君はたまたま僕と同じ施設の出身で、治癒師の能力があったから連れてきてやったけど、勇者の僕にいつまでも口うるさく注意してきて、自分の立場を弁えていない」

「そんな！ 勇者として一人で王都に行くのが嫌だって、私を誘ったのはシャルルじゃない」

「君が言わせたんだろう？ 僕には君は不要だった。ずっと前からね」

シャルルの中では少なくとも、そうなっているらしい。

私は悲しみも怒りも通り越して、すうっと自分の気持ち冷めていくのがわかった。

この四年、彼らを支えてきたつもりだったけど、そんな風に思われていたんだ。

沈黙する私を、落ち込んでいると勘違いしたのだろう。シャルルは追い打ちをかけるように、高らかに宣言した。

「治癒師リーナ。勇者シャルルの名において君をパーティから追放する」

冷たい目で見下ろすシャルルと、勝ち誇った顔のアデル、敵意をむき出しにしているサイオンと、いつも通り無表情のフェリシア。



その後ろから現れたのは、これまで無言で様子を見ていた小柄な美女だった。

「あとのこととは、心配なさらずとも結構です」

艶やかな黒髪に、血赤珊瑚ちあかさんじゆのような色の瞳。

二十歳前後に見えるその美女は、私に向かつてにこやかに言った。

「初めまして、リーナ様。私、カナエっています」

「カナエ、さん」

私はまじまじと彼女を見た。

カナエ……変わった名前だ。この国の名前ではない、むしろ……

「カナエさんは異世界からやってきたんだ」

シャルルが説明する。

珍しいことではあるけれど、ありえないことではなかった。

この国は「どこかの世界」と繋がっていて、ごくたまに、その世界から人が「落ちてくる」。そ

れは冒険者をしていれば誰もが知っている事実。

私はそれを冒険者だからではなく、体感として知っているけれど。

「私が貴女の代わりに、パーティの治療を担当させていただくことになりました」

美女——カナエは穏やかに説明した。

「カナエさんは治療師としての腕も一流だし、女性らしくて優しいし……誰かさんとは大違いだ

よ！」

サイオンが自慢げに言ってくる。あんまりな言い草なので私は聞き流した。

「爪の垢でももらったらどうだ？ 煎じて飲んでも効果があるとは思えないけどな！ 前から年下のくせにいちいち小うるさい、生意気な女だと思っていたんだよ！」

……どうも、サイオンは私にあれこれと指図されたり、お小言を言われるのが嫌だったみたいだ。猪突猛進な性格のサイオンを、穏やかな気質のシャルルは諫めづらいようだし、アデルはサイオンのことが好きだから嫌われるようなことは言わない。

せめて私がストッパーになって、彼が極力無茶をしないように注意していたつもりだけれど、彼にとっては「気に食わない小娘のお小言」だったわけか。

「リーナさんが抜けても、私が勇者様ご一行を必ずサポートします。だからどうか、安心して体力回復に努めてくださいね？」

小首を傾げたカナエが猫みたいに大きな目で、同意を求めるようにシャルルを仰ぐ。お顔の作りだけは、どこから見ても完璧な我が勇者様は、ほんの少し目元を赤らめた。

私は内心で深くため息をつきながら思い出していた。そういえばシャルルって、ちっちゃくて可愛くて、女の子らしい子が大好きだったなあ、って。

怒りより何より、虚しさで襲われて、私は虚脱してしまう。四年間の苦労や、楽しかった思い出や、その他諸々を思い出して……ベッドの上で手を組んで、シャルルを見つめた。

幼少の頃から十年以上もの間、家族みたいに思っていた勇者を。

「そっか、わかった」

「リーナ、いくら君が嫌だと駄々をこねても……えっ？」

あっさり頷いた私に、シャルルが何故か驚く。

「仕方ないよね、皆が多数決でそう決めたのなら。ここは民主主義だよ、仕方ない」

「ミンシュ？」

「あ、何でもない、こつちのこと。……もう一度聞くけど、私がそばにいないくても、シャルルは困らないんだよね？」

私が念を押すと、シャルルは首を縦に振った。

「当たり前だよ。君がいなくても全く困らない。むしろ都合だ」

「金輪際、シャルルとパーティーを組むことはないけど、それでいいんだよね？」

「だからそうだって言っているだろう」

素っ気ない口調でシャルルは再度肯定した。

金輪際、私にかかわりはしない、と。

……じゃあ、もう、いいや。

私はシャルルという存在をくしゃくしゃに丸めて、頭の隅にある「ゴミ箱フォルダ」にポイッと捨てることにした。シャルルがそう決めたのなら、仕方ない。

私も過去のことは忘れて、明日からのことを考えよう。

「ねえ、フェリシア。皆の共同財産から、私の分だけでもらっついていい？」

私はこの愁嘆場、あるいは茶番の間もずっと無表情を崩さない魔導士に聞いた。

年齢不詳の美女フェリシアは無言で頷く。

準備のいい彼女は私に、新しく作ったらしい私だけの口座の証明書を渡してくれた。

魔鉱石という特殊な鉱石で作られた薄い石版タクレットに手をかざすと、その表面が仄かに光り、残高が浮かび上がる。

少ないな、と眉をひそめた私を、アデルが鼻で笑う。

「もらえるだけありがたいと思いなさいよ！ あんたがこの宿屋で楽してた間の宿泊費は、当然さっぴかせてもらったから！」

左様ですか。

返事をする義理はないから、私はそれを無視した。

フェリシアはアデルをちらりと見て、何か言いかけたけど、結局口をつぐむ。

私は最後にフェリシア以外の三人と、異世界から来た美女を見つめて、ゆっくりと言った。

「わかりました。では、さようなら」

あっさりとした態度に、サイオンとアデルが若干鼻白むのがわかる。

私が促すまでもなく、扉を開けて全員が、さっさと出ていく。

「拍子抜けしただぜ。あっさり引き下がったな、あいつ」

「元々冷たい女なのは知っていたわ！ あたし達のことを仲間だなんて、少しも思っただけじゃなかったよ。だから平気なんだわ」

サイオンとアデルの無神経な大声に、さすがに精神がささくれ立つ。

「ああ、よかった。これで肩の荷が下りたよ」

やれやれ、とばかりに言ったのは、シャルルだった。

その声にサイオンとアデル、それからカナエの笑い声が続く。

私はベッドに潜って、唇を噛み締めた。

泣くもんか。

絶対に、こんなことで泣かない。

とりあえず寝て、精神と体力を回復させるんだ。

目をつぶると途端に眠気がきて、私は昔のことを珍しく夢に見た。

私とシャルルと……それからここにはいないもう一人の幼馴染おとななじみが、まだ子供だった頃のことを。

前世、なんてものがこの世に存在すると思う？

私、リーナ・グランがその存在に気づいたのは五歳のときだった。

両親を流行病であっさり亡くし、施設に連れていかれた夜のこと。私は一人になった心細さにメソメソ泣いて、心配そうに見守る子供達も無視して、ずっと悲しんでいた。

そんな私に声をかけてくれたのは、天使みたいに綺麗な二人の子供だった。

一人は、蜂蜜色の髪に海より青い瞳をしたシャルル。

もう一人は、黒髪に宝石みみたいな青紫の瞳と真っ白な肌をしたアンリ。

大丈夫？ と聞いてくれたのはシャルルだったが、私が無視すると彼は困り果てて、連れのアンリを見た。

アンリは泣いてばかりで、ご飯も食べない私を無理やり立たせると、嫌がる私の襟首をつかんでズルズルと食堂まで引きずっていった。

お金持ちの両親に甘やかされたお嬢様だった私は、食事を前に駄々をこねた。

『こんな硬いパンなんて、食べられないわ！ 捨ててしまつて！』

シャルルは困っていたけれど、アンリはものすごく怒った。

『ばか！ ご飯を食べないと死んじゃうんだからな！』

それから、ポカッと、可愛らしい子供の力で私を小突く。

人に叩かれたことなんてなかった私は、ビックリして椅子ごとひっくり返り——運悪く別の椅子に頭をぶつけて、後頭部がぼっくりと切れた。

ピューッと音を立てそうな勢いで、というのは大げさだけど、かなりの血が出た。シャルルが怯えて泣いて、アンリもビックリして、当事者の私は血まみれになった自分の顔を鏡で見て、再びひっくり返った。

『死んじゃう！ こんなに血が出たら、リーナは死んでしまいます！』

わんわん泣いて、ショックで寝込んだ一昼夜。とある人物の、生まれてから死ぬまでの出来事が、私の頭を走馬灯のように駆け巡った。

日本という国に生まれて、多感な少女時代を過ごし、就職して、気ままなお一人ライフ。しかし、風邪をこじらせて呆気なく亡くなり——どうやら、この国に生まれ変わったらしかった。

その人物は、どう考えても以前の「私」だった。

ここは、いわゆる異世界？

もしくは同じ宇宙にあるどこかの惑星のかな。

それともこれは、死後に見ている夢なのか？

目が覚めた私は、自分の小さな手をしげしげと見つめて、つねつてみた。

『痛い……』

痛覚があるからには、夢でなく現実だと考えた方がいいんだろう。私は不思議とすつきりした頭で状況を整理した。

そこそこお金持ちの家に生まれた私だったけれど、両親が亡くなり、近しい親類もいないために施設に引き取られた。

両親の遺産は受け取っていない。実は両親には借金がたくさんあって、その返済に消えたと、遠い親戚が施設に申告したのだとか。

胡散くさいなあ、と思いつつ、私はベッドから下りて、部屋の隅に置かれた鏡台へ向かった。

ひび割れた鏡をまじまじと観察し、そこに映った幼女と見つめ合う。やや暗めの金髪は腰まで綺麗に伸びていて、こちらを不思議そうに見つめる瞳は金と緑の中間色。

どこから見ても、良家の小さなお嬢さんといった感じだった。

うーん、こんなちっちゃいんじゃないなあ。しばらくは逃亡するのも、自立するのも無理そう。この国の情勢もよくわからないし、当面は施設で暮らすしかない、と判断した。

私が鏡とにらめっこしていると、廊下から軽い足音が響いてくる。

『起きて大丈夫なのか!?』

扉を開けると同時に可愛らしい男の子——アンリは心配そうに私に尋ね、次いで謝る。

『ごめんな、怪我をさせて』

青紫の腫が悲しげに揺れる。

わあ！ 睫毛なっがーい！ と前世の私がミィハーに喜ぶのを自覚しながら、ぶんぶんと首を横に振った。

『大丈夫、そんなに深い傷じゃないから。泣いたのはビックリしただけ』

『でも』

『大丈夫、大丈夫！ すぐに治るよ！ 今は禿げているけど！』

天使を心配させないようにと傷跡を見せたら、幼児には衝撃的だったらしい。アンリはウツと蒼ざめた。

あ、ごめん。ちよっぴり生々しかった……？

ワナワナと手を震わせて、泣くかと思っただけれど、アンリはキッと顔を上げて私を見た。

『禿くらい、気にするな！』

『う、うん？』

『俺は気にしない！』

『そ、そう』

『責任とって、俺がおまえを嫁にもらってやるから！』

よよよ、嫁——！

年齢で言えば幼稚園児（推定）の分際で、嫁ええええ!? 最近のガキンチョは！ とツッコみつつも、天使の真剣な顔を笑うわけにもいかず、私は口元に手をあてた。

多分、アンリには恥じらっているように見えただろう。

『だから、禿も心配するなよ、リーナ』

『うん、ありがとう……』

私は笑いを堪えるために言葉少なに言った。

小さな男の子が、女の子を喜ばせようと口にした精一杯の言葉が『嫁』なのかな？

多分、大きくなったら忘れてしまっただろうけど、アンリが施設にやってきたばかりの可哀想な私を慰めて、励まそうとしているのがわかったから、その気持ちが嬉しくて私は微笑んだ。

『でも、アンリ。禿が治つたら、もう気にしなくていいからね！』

『治らなくていいよ！俺がちゃんと嫁にするから！』

ムスツとむくれるところも可愛い。本物の天使か。

私がニコニコしていると、扉が再び開いて、もう一人の天使——シャルルがやってきた。

『ねえ、そろそろ夕飯の時間だよ？ お話が終わったのなら、二人ともご飯を食べに行こう？』

私達三人は、それからずっと一緒だった。

シャルルとアンリが私の一つ上だから、三人兄妹みたいに育った。

眠るのも一緒、ご飯も一緒。遊ぶのも、たまに家出するのもし一緒。

私達がいた施設は、何かしらの魔力を持った子供が多かったから、それを扱う技術も三人で励まし合いながら学んだ。

両親を失った私にとっては、二人が家族のようなもので……

だけど、私が十三になった年、楽しい時間は唐突に終わった。

『アンリの実の父親の遣い』を名乗る人が、彼を迎えに来てしまったのだ。

アンリの父君はアンリの存在を長いこと知らずにいたのだけれど、数か月前に初めて知って、すぐに引き取ることにしたらしい。だけど、施設の職員達は『アンリが将来有望だとわかったから引き取りに来たのかもしれない』なんてこそそと噂をしていた。

無理もない。アンリは私の目から見てもハツとするほど綺麗で、頭もよくて、剣術だってでき、とにかく完璧だった。

『今は仕方ないから、父親って人のところに行くけど、そのうち迎えに来るからな、リーナ』

『ありがとうね、アンリ』

真剣な目でアンリが告げてくれたので、私はお礼だけを言った。

多分、迎えになんて来れないよ、アンリ。

その予感を裏付けるように、アンリが馬車に乗り込んだあとで、磨いた銅のような珍しい色の髪と瞳を持つ、優しそうな印象の青年が、私達の前に現れて告げた。男爵だというその青年は、柔らかな口調で、けれどもきっぱりと私達に宣告する。

『君とシャルル君が、アンリ様にとって大切な人達だというのはわかっています。ですが、どうかアンリ様のために、彼のことは忘れてください。これからは住む世界が変わってしまうのです』

それは懇願ではなく、通達だった。

それから、と彼は私達に銀貨が入ったずっしりと重い袋を渡す。

シャルルは激昂して銀貨を突き返そうとし、銀貨が地面に散らばる。私はそれを一枚一枚、跪いて拾う。青年も優美な指で拾い集めて、袋に入れ直してくれた。

私は、青年を見上げて……素直に頭を下げた。

『ありがとうございます、助かります』

『リーナ！』

シャルルは非難したけれど、私は銀貨を返さなかった。

そのお金で施設の設定を新しくして、土地を増やして畑を作ればいい。

寄付だけじゃなくて、施設独自の収入もあれば、子供達の生活は安定する。施設が土地を買わないで、と役人達は眉をひそめるかもしれないけれど、必要なことだ。

こういうとき、日本で暮らした記憶があつてよかつたな、と思う。感情だけで動かずに、長い目で見て何が得かを考えることができるから。

貴族の青年は無言で一礼して馬車に乗り込む。

私は彼の背中を見ながら、半ば自分に言い聞かせるように言った。

『このお金で、子供達が楽に生活できるようになったら、アンリも喜ぶよ、きっと』

『……でも……僕達はずっと一緒にやなかつたの？ リーナは、アンリがいなくて平気なの？』

シャルルの拳が震え、その手が胸元にあてられる。

そこには、硝子を丸い形に整え、革紐を通した首飾りがあつた、

私も胸に手をあて、シャルルと同じ形の首飾りに視線を落とす。この国の騎士は、自分の所属す

る団の紋章を模した飾りをつける。それに倣つて三人お揃いの何かがほしくて、自分達の瞳の色と同じ硝子を探して、首飾りにしたのだ。

『シャルル……』

『わかつているよ、リーナ。アンリのためにはこの方がいいって。でも、僕は寂しい……』

シャルルはアンリと乳児の頃からずっと一緒なのだ。私より、ずっと辛いに決まっている。

私は何も言えずに、ただ沈黙した。

馬車の轍がくつきりと、さよならの線を引いて彼我を分けていく。別れの言葉を口の中で何度も繰り返しながら、私は銀貨の入った重い袋をギュッと胸に抱く。

がっくりと肩を落としたシャルルが、国王の出したお触れに義務として応じて、国中の若者の中から聖剣の主を選ばれたのは、その一年後のことだった。

「あー！ スッキリ！ したー！」

パーティが去った翌々日。ようやく全快した私は、宿屋を引き払って冒険者ギルドに赴いた。何だか懐かしい夢を見たけど、さつさと忘れよう！

いつまでもしよんぼりしていたって、何も変わらない。とにかく前を向かなきゃ。

「あ、リーナさん！ よかつた、起きられるようになったんですね」

今や顔馴染みになったギルドの受付嬢ロザリーが、私を見て目を潤ませた。

どうやら私の事情を知っているらしい。なら、話が早いや。

「その……、大変でしたね」

「うん、ちよっとね……おかげで色々と手続きをしないとイケないんだけど」

「何でもどうぞ！」

私はありがとう、と苦笑して石版タフレットを出した。

このハーティア王国の冒険者で魔力がある人間は皆、石版タフレットを持っている。持っているもの同士でメッセージのやり取りもできるし、自分が持っている財産を数値として記録して、金銭のやり取りもできる。

昨日までの宿代が引かれた、手持ちの残金を確認する。これからの生活を考えると、ちよっと迷ったけど——半分は施設の代表に送金した。

施設の代表はつい最近代替わりして、私達より少し年上の施設出身者が務めている。しばらく仕事のアてがないから、なかなか送金もできないかもしれないしね。

この国のギルドは冒険者の登録をするだけでなく、冒険に必要な武器や旅装の販売もしている。残りのお金で一人旅に必要な道具を揃そろえることにした。

気のいい受付嬢が私の境遇に同情して、少々旧式だけれどお買い得な旅装を引っ張り出してきてくれる。や、優しい！

感激する私に、優しいのはリーナさんです、とロザリーが口を尖とがらせた。

「もっと怒ってもいいですから！ シャルルさんも悪いですけど、何ですか!? あの人！」

「あの人？」

「カナエさんとかいう異世界の人です！」

ああ、と私は頷うなずいた。

小柄で、艶つやのある黒髪の美女。多分、日本からの来訪者。

その割に赤みの強い珊瑚色さんごいろという、何とも珍しい瞳だったけど、あれは異世界に來ちやった影響なのだろうか？

「シャルルさんにべたべたして彼を洗脳して、婚約者のリーナさんとの仲を引き裂くなんて、ひどいー！」

「婚約者？ 私が!？」

「え！ 違うんですか？」

驚いた私にロザリーも目を丸くした。

「違う違う、ただの幼馴染おさななじみだよ」

「意外です。シャルルさんはリーナさんに頼りつきりって感じだったから、てつきり……」

「もう、十年以上の付き合いになるからね」

「婚約者じゃなくても、ひどいです……。それなのに、リーナさんったら、文句一つ言わないなんて」

しおしおと代わりに項垂うなだれてくれるロザリーのおかげで、私は少し元気が出た。自分のために怒ってくれる誰かがいるって、いいな。

「仕方ないよ。勇者のシャルルの旅に、いつまでも幼馴染おさななじみがくっついていべきじゃなかったんだ

よ、きつと。潮時^{しほとき}つてやつ！」

「そうですか。……それで、リーナさんはこれからどこに行くつもりなんですか？」

私はうーん、と顎^{あご}に手をあてて考え込む。

施設に一度顔を出してからゆっくり決めよう、と思っていたけど、シャルルとの軋轢^{あつれき}を施設の仲間達に説明するのは今はまだしんどい。手紙で知らせ、訪問はまたの機会にしようかな。

そうなる、特にあてはないのだ。

「行き先は決めてないんだけど、シャルルと同じ街にいるのも気まずいなあ……」

さて、どこに行こうか。私は石版^{タフストーン}に指で円を描いた。

私の求めに応じて地図が現れる。

東に行くか、それとも西か。南の諸島に行くのも楽しいかもしれないけれど、あまり土地勘のないところに女一人旅は不安だな。

と、思っていたら――

「それなら、この街に留まったらどうかしら？ シャルル達は別のダンジョンへ行くみたいだから」

聞き慣れた声に、私は思わず振り返る。黒に近い紫の髪を緩く結い上げた美女が、ひっそりとたずんでいた。

「フェリシア！」

「リーナ、二日ぶりね？」

「ど、どうして、ここに？ 皆と一緒に رفتったんじゃないの？」

私の問いに、パーティの仲間の一人、魔導士フェリシアは華奢^{きゃしゃ}な肩を竦^{すく}めた。

受付嬢のロザリーを気にしているのか、視線を奥に移して言う。

「ロザリーさん、奥の食堂^{ダイニング}って今使ってもいいのかしら？」

「まだ料理人はいませんが、飲み物ならお出しできます！ お茶でもいいかですか？」

「ありがとう。そうね、お茶より麦酒^{ビール}にして？」

朝からガツリ飲むつもりらしい。

涼しい顔して酒豪^{しゅご}の美女は、私を誘って奥のテーブルに座る。

ロザリーが運んできてくれたジョッキを、フェリシアが片手で掲^{かか}げたので、私も付き合うことにした。

「乾杯しましょう、リーナ」

「何に乾杯？」

「そうね、お互いの転職に……かしら」

「お互いの？」

「そう。私もシャルルのパーティを抜けてきたの。乾杯」

私は驚きつつも、乾杯、とジョッキをぶつけた。

「どうしてフェリシアまで？」

確かに、他の皆が私を責めている間も、フェリシアは無言かつ無表情だった。私の追放処置に賛

成ではないのかな、とは感じていたのだけれど、元からパーティメンバー全員に塩対応な魔法使いだから、単に興味ないだけなのかなー、とも思っていた。

私の疑問に、フェリシアはぐっと一口麦酒を飲んでから、どん、とテーブルにジョッキを置いて答えた。

「リーナ、貴女は私が旅に同行した経緯を覚えている？」

「ええっと」

「私はね、勇者シャルルと、その幼馴染にして優秀な治療師である聖女リーナが旅に出るにあたって、まだ若い二人だけでは不安だからという王太子様の命で、貴女達に同行したのよ」

そうでした。私は頷く。

聖女のくだりはともかくとして、旅に出ることが決まった四年前、シャルルは十五歳で、私はまだ十四歳。慣れない旅ということもあり、同行者が必要だった。そんな私達を心配して王太子様（まだお会いしたことはないのだけれど）が監督者として任じてくれたのがフェリシアだった。

フェリシアは王宮付きの魔導士の一人で、本来は王太子殿下の直属の部下だ。

彼女は私達のパーティの仲間として協力してくれるだけでなく、王宮との連絡役という任務も担っていた。

「だから、シャルルに言ったの。『私はシャルルとリーナの二人に仕えるよう任じられました。状況が変わったことを王宮に報告せねばなりませんので、一度王都に戻ります』とね」

「えーと。つまり」

フェリシアの目がすわっている。

その迫力に、私が明後日の方を向くのに構わず、美魔女は続けた。

「シャルルに『貴方のしたことを王宮にチクるけど平気？』って言ったつもりだったの」

「で、ですよー」

それに対して、シャルルが何と言ったかというと。

『それは残念です。道中お気をつけて』ですって。サイオンにいたっては喜んでいたし」

魔導士のいないパーティは、色々と不便が多いはずだ。

それに全く気づいていないのか、それとも他にあってがあるのか。

「それにしても、何故別のダンジョンへ？ このダンジョンを探索するのが国王陛下から命じられた仕事でしょう？」

私の問いに、フェリシアは再び肩を竦めた。

「カナエの提案よ」

「カナエさんの？」

「アンガスのダンジョンの魔物は手強いから、近くにある別のダンジョンで似たような魔物を倒して、経験値を上げてから戻ってこようって。その提案にシャルルが賛成したの」

フェリシアの説明を聞いて、私は俄かに不安になった。

「フェリシア、私も陛下の命令でダンジョン探索に来たでしょう？ ここは一度王都に戻って、何かしら指示を仰いだ方がいいのかな？」

「今回の命令は、『勇者シャルルとその仲間達』に出ているわ。今回のことで貴女が何か責められるとは思えないし……まあ、さすがに貴女を追放するなんて王宮側も思ってたでしょうけど」

だから、とフェリシアは空になったジョッキを置いた。ペースが速い。しかも全く顔色が変わらないのがすごい。酒豪怖い。

「とにかく私は一度、王都へ行くわ。私が戻ってくるまで、貴女はひと月くらい、この街でのんびりしててくれないかしら」

「のんびり……。でも、このダンジョン探索も誰かがしないとけないんじゃない……」
シャルル達が別のダンジョンに行ったなら、アンガスのダンジョンの探索は中止されてしまっているはずだ。

地下五階層より下で不穏な動きをする魔物の正体を暴き、その魔物を倒さない限り、アンガスの街の人はダンジョンの上の方の階層へしか行けない。

アンガスの重要な交易品の一つである魔鉱石は、危険の少ない上の方の階層でも採掘されるけど、危険度に比例して採掘量は少なく、街の人は困っているという。

その状況を打開するために、私達は派遣されてきたただけだな。

「王都から飛竜騎士団を派遣してもらおうよう、依頼したわ。数日後には到着するでしょう。ひよつとしたら、彼らの治療やダンジョンの情報共有のために、貴女に声がかかるかもしれないけれど、そのときは助力してくれると嬉しいわ」

「もちろん」

私が頷くと、美魔女は優しく目を細めた。

「貴女はどこへでも自由に行っていていい、っていうお墨付きを私がもらってくるから、それまではこの街でゆっくりしていて？」

「わかった」

フェリシアとこんなに長く喋ったのは、初めてかもしれない。

いい人だけど、どこか孤高といった雰囲気があって、打ち解けられなかったのだ。

別れる間際になって、優しさがしみるなあ。

「しばらく、街でのんびりしてみる」

「ええ。最後は何か拍子抜けしたけれど、数年間、若者達と一緒に冒険できて楽しかったわ」
にこり、と微笑まれ、つられて私も表情を崩す。

シャルルが十九歳、私が十八歳。

そういえば、美魔女のフェリシアはいくつなんだろう？

私達より少し上かなーとは思うけど、若者達、だなんて大げさだなあ。

「フェリシアはいくつなの？」

私は冷えた麦酒を一口飲みながら、美しい人に聞いてみた。秘密よ、って笑われるかなーと思うけど。

「四十八よ、今年で」

ブホッ。

私は盛大にお酒を嘔き出した。

「ヤダ、きたない」

難なく避けたフェリシアが、ふきんで手早くテーブルを拭く。て、手際がいい。対して私は、完全にむせてしまっていた。

よ、よんじゅうはちいいいい!? 私の倍以上!?

せいぜい三十前後かなーと予測して聞いたんですけど!!

「うそお。だだだ、だって、四十……はちい? うっそお!」

「よく、お若く見えますよねー、って言われるの」

お若く見えるってレベルじゃないって!! 人外のレベルだよねそれ!!

「あ、違う、四十九になったかもしれない。どっちだったかしら……。最近、自分の年齢を忘れがちなのよね……」

その憂い顔には皺一つない。

「若者の話題になかなかついていけなくて、貴女達ともあまり打ち解けられず、悪いことをしたと思っているのよ」

ほう……とフェリシアは儂げなため息をつく。

えっ、そうだったの!? ミステリアスなキャラじゃなくて、ジェネレーションギャップゆえの遠慮だったの!?

あまりの驚きで、シャルルに追放されたことがどうでもよく思えてきたぞ。

私が何も言えないでいると、フェリシアはまた肩を竦めた。

「他の三人にはどうも気後れするんだけど、貴女には同世代のような親しみを感じるのよね……」

「え、そう?」

「何故かしらね?」

「さ、さあ……」

前世は三十前後で死んで、今世では十八歳。合わせて四十八……

わー、ドンピシャだ!

魔導士の勘のよさに舌を巻いていると、当のフェリシアはふふ、と笑う。

何か、見透かされてる気がする……。どうしよう!

「あの一、その若さの秘訣は何らかの魔術?」

動揺を誤魔化すためと、純粹な好奇心から聞いてみると、美魔女はアンニユイに髪をかき上げて耳にかけた。

ほんのり甘い香りがする。ふぁ、ファビュラス……

「それはね、秘密なのよ」

そうですね……

「では、またね。リーナ」

フェリシアは微笑んで立ち上がり、またフードを被る。

私も慌てて立ち上がった。新しい門出のお祝いに、とフェリシアが麦酒をおごってくれたので、ロザリーと一緒に外の門まで送る。

フェリシアが戻ってくるまで、この街でのんびり、スローライフを楽しもうかな！
まずは、家探しをしなくっちゃ。

その日はギルドにある簡易宿泊所に泊めてもらい、ぐっすり休んだ。

翌朝、朝食を買いに行こうと思いい階に下りると、ロザリーが深くため息をついていた。

「どうしたの？ ロザリー」

私の問いに、気のいい受付嬢はうんざりした様子で食堂を指さした。

テーブルが一つと椅子がいくつか、尋常じゃないレベルで損壊している。

「昨日、ダンジョンから戻ってきたパーティが、些細なことから喧嘩になって」

「へえ」

私達の他にも冒険者はたくさんいて、ダンジョンに行く人々も少なくない。ダンジョンは危険も多いし、ときにはパーティの関係も険悪になるし、酒場で酔って物にあたる人もいる。

散らばった破片や木屑を眺めて「掃除が大変」とぼやくロザリーに、私は片目をつぶってみせた。

「泊めてくれたお礼に、復元するよ」

「え？」

私はロザリーからチョークを借りた。他に誰もいないことを確認して、損壊してしまった椅子や

テーブルを元の場所に起き、それらをグルリと囲むように床に円を描く。

昨日の夜、私が寝る前には平穏だったはず。ということは、大体十時間つてとこかな。

戻す時間や呪文を、古代文字で書いていく。最後の文字を書き終えると、仄かに文字が光った。

「復元せよ」

私の宣言で、倒れていた椅子が、まるで生き物みたいに立ち上がる。

それがピヨンと飛んで元の位置に戻ると、バラバラになっていた背の部分も自分の役割を思い出したかのように飛びついた。

映像を巻き戻してみたように、椅子とテーブルが昨日の姿を取り戻していく。

バラバラと散らばっていた木屑が集まり、最後の一片がテーブルの真ん中に、パズルのピース

みたいにピタッとはまる。

うん！ 修復完了！

しばらく寝込んでいたから腕が落ちたかな？ と思っていたけど、杞憂だったみたい！

「はい、泊めてくれたお礼！」

「リーナさん！ すごい！ さすがです！ すごすぎますっ！」

達成感いっぱいでも振り返った私に、ロザリーは大感激してくれて、紅茶とサンドイッチをごちそうしてくれる。

葉物野菜とハムとチーズが挟まっただけのシンプルなサンドイッチは、ロザリーが「特製なんですよ！」と言うオリーブオイルをつけて食べた。

少し酸味のあるオリブオイルがチーズとハムに絡んで美味しい。

お腹が満足したところで私は彼女に聞いた。

「実は、家を探したいと思っっているんだけど」

「家ですか？」

シャルル達は別のダンジョンに行ったから顔を合わせる心配はない。フェリシアに聞いたダンジョンの位置からすると、あと半年近くは戻ってこないかも？

フェリシアは魔法を使わず、馬で王都との間を往復すると言っていたから、戻ってくるのにひと月にかかるだろう。

「待っている間、宿屋に泊まるより家を借りた方が経済的かなあつて」

「そうですねえ……」

この国のギルドは冒険者の登録、仕事の斡旋、財産管理だけでなく、不動産も扱っていることが多い。これも例に漏れずだった。

ロザリーが壁に貼られていたチラシを数枚持ってきてくれて、それを二人で眺める。

「いい物件があるといいなあ。実は一人暮らしって憧れていたんだよね」

「そうなんですか？」

「うん。自分の部屋って持ったことがなくて」

施設にいた頃は同年代の女の子達と大部屋暮らしだったし、旅に出てからは野宿か、アデルとフェリシアとの相部屋だった。

「物件、他にも色々ありますよ。詳細が書かれたカタログも持ってきますね」

「ありがとう！」

カタログを見ながら悩んでいると、ロザリーの上司にしてこのギルドの事務長である、ヤコブさんがやってきた。

ヤコブさんはまだ三十前と、ギルドの事務長にしてはとても若い。愛想はないけれど、仕事が速くて丁寧な人という印象を抱いている。

ロザリーが事情を話すと、彼は無精髭の生えた顎に手をあてて、ふんふんと頷いた。

「家を借りるって？ リーナさん」

「ええ、できれば」

「うーん、だが、資金はあるのかい？」

確かに、私のお金はだいぶ減ってしまった。家を借りる資金としては心許ないかも。

でも、と私は荷物の中からいくつかの天然石を取り出した。

クオリティが低くて宝石としては販売できないからと、安く譲ってもらった天然石だ。

「この石を売ろうかなと思っっています」

「これは売り物にはならないよ」

「ええ、知っています……だけど」

私は腰に差していた護身用のナイフで、指の先に小さな切り傷をつけた。

二人がぎよっとするのに構わず、ふくりと浮いた血の玉をハンカチで拭って、天然石を近づける。

すると傷口は、瞬く間に塞がった。

私の治癒の力を天然石に込めたのだ。

「す、すごい……。リーナさん、これどうしたんですか？」

「治癒師の癒しと同じ効果を、天然石に付与してみました」

「はー、耳にはしていたが、リーナさんの能力はすごいな」

へへ、と私は笑う。

通常治癒師は、三つの方法をもって他人を治療する。

一つ目は、治療が必要な人間の潜在的な治癒力を高める、自己治癒といわれる方法。八割の治癒師がこの方法を使う。ただし、対象に自己治癒できるだけの体力が残っていることが前提なので、重体の相手には使用できない。

二つ目は、治癒師が自分の治癒力を分け与える方法。これは相手が瀕死の状態になったときに使用する方法だけど、できる治癒師は全体の二割ほどだし、ひどいときには治癒師本人が昏睡してしまう場合もある。

三つ目は、私がさつき椅子とテーブルを修復したときに使った、少しだけ時間を戻す方法。これができる人間はほぼいないし、修復に必要なパーツが全部揃っていないといけないとか、あまり時間が経つと修復できなくなるとか、諸々条件がある。ゆえにあまり治療には向かず、どちらかと言えば物の修復に利用される。

この三つの方法が全て使える人間は、あんまりいないんじゃないかな！

そして、実はもう一つ方法がある。

「治癒の力を、天然石に込めたんです」

私は天然石を指でつまんで二人に一つずつ渡した。

「あ、仄かに温かいですね」

ロザリーが興味津々とばかりに石を見つめる。

私は、穴をあけたピンクの色石を取り出した。針金を通して一方の端は小さく丸め、もう一方は紐が通せるように大きめの円を作る。

簡単だけど、ペンダントトップのできあがり！

私はそれに紐を通して首にかけた。

治癒の力にしろ何にしろ、自分の異能を物に込めることができる人間は、三つの方法を使える治癒師以上に希少な存在だと思う。

シャルルが勇者に選ばれたとき、仲のよかった私も「治癒能力があるなら受けてみなさい」と言われて適性検査を受けて、そこで初めて判明した能力なただけ。

三つの治療方法を駆使することができて、さらにはその力を物に込める能力も持っている。

その希少性が、私が『聖女』だなんておおげさに言われちゃう所以なのだった。

「ヤコブさん、これ、買ってくれませんか？」

私はにこりと笑ってみせた。

治癒の能力を込めた商品は他にも存在するけれど、大抵はポーシヨンとかそういう味気ない物

だった。この国は何かしら宝石を身につけるのが当たり前の文化だし、以前から宝石に込めたいいんじゃないかなーと思っていたのだ。

「一つにつき銀貨五では？」

銀貨一枚は、日本円で大体一万円くらいだと思う。

「もう一声。できれば九とか。天然石も無料じゃないですし、他の材料費もあるし」

「一声ってレベルじゃないだろう？ それ。せめて六だな」

「うーん。では、五個お売りするので八とかはどうですか？」

「石の効力はどのくらい持つ？」

「未使用なら経路上、三か月は持ちますよ」

私は仲間達の防具に治癒の力と破邪はじやの力を込めていた。

大体、三月に一度のペースで込め直していたから、効果は実証済みだ。

そういえば、この前シャルル達の防具に力を込めたばかりだったなあ〜と苦々しく思い出したけど、きっぱり忘れることにした。

「うーん、じゃあ七だ……その代わり、この商品の評判がよかったら、次回からは原材料の天然石を格安で購入できる店を紹介するよ、ってことでどう？」

「乗りました！」

私達はがつつりと握手を交わした。

その横でロザリーが「この緑色の石、綺麗〜」と喜んでる。

天然石を五個売って銀貨三十五枚。これは金貨三枚と銀貨五枚にあたり、日本円で三十五万円に相当する。この街で家を構えるのには十分な資金を手に入れたのではないだろうか、と私はほっとした。

「それから、私が作り手だということはご内密に……」

「いいよ、冒険者の秘密は守る。そうじゃないとギルドは成り立たないからね」

ヤコブさんはただし、と付け加えた。

「取引先をしばらくうちに限定してくれるかな？ 顧客きやくの情報は守るけど、こちらうまも旨みうまがほしい」

「もちろんです」

商談成立！

ロザリーがさっそく一つ買ってくれた。

嬉しいけど、決して安い買い物ではない。ロザリーは冒険に行かないのに、いいのかな？

「あげたい人がいるんです」

可憐かわに頬ほを染める姿を見れば、どういう関係の人かは想像がつく。

「そうなんだ？ 誰かにあげるなら、お守り用にピアスとか指輪に加工してもいいかも」

「わー、ほしいです！ それ」

「今度、職人さんに会いに行きたいな。一緒に行ってくれる？」

「もちろんですよ〜！」

ロザリーが喜んでいいる。当座の資金を獲得できた私もうきうきである。
「さて、リーナさんの新居だけど」

とヤコブさんが言った。

「ちようどいい物件を紹介できると思うよ」

「本当ですか！」

自信ありげに言ってくれたヤコブさんに、私は声を弾ませた。

「多分ね。希望の間取りってある？」

ええっとですねえ、とロザリーが持ってきてくれたカタログをめくる。

昔、日本で住んでいたのは都内にある、あまり広くない部屋だった。

駅近！ 格安！ を最優先に探したから、それなりに満足はしていたんだけど。

「広さは重視しないんですけど、水回りと寝室は別だと嬉しいですよ」

値段はこのくらい、と示すと、ふーん、とヤコブさんは顎を撫でた。

「台所って、必要？」

「本格的な料理はしないかもしれませんが。簡単な物が作れたらなあ、ってくらい」

「湯を沸かしたり、食材を洗ったり？」

「はい、そんな感じです」

少し歩けば屋台があるし、基本的にご飯は各々お気に入りのご飯屋さんで食べるのが、この国の文化だ。

「あとは？」

「少しうるさくてもいいから、陽あたり良好だと嬉しいな」

「じゃあ、ここだ」

ヤコブさんはカタログではなく、上に指を向け、私とロザリーは視線を上げる。上？

一拍遅れてロザリーがぼんっと手を打った。

「四階ですか！ ヤコブさん」

「そう、四階だよ、ロザリー」

意思疎通し合う二人に対し、私はまだ疑問符を飛ばしている。

「ひよっとして、ギルドの上、ですか……？」

「そう、当たり」

ギルドの上か！ 考えもしなかった。

「四階は元々、若手職員のための寮だったんだ。けど、最近の若者は職場に住みたがらないからな。蜘蛛の巣が張って困っている。だから、リーナさんが使ってくれるとありがたいし、二部屋あってどちらも空いているから、好きな方を選んでいいよ」

ヤコブさんは茶目つ気たつぷりに片目をつぶってみせた。

うーん、ギルドの上かあ。頼もしい反面、人の出入りは多そうだな。

「気に入れば、の話だけどね。とりあえず見に行こう」

「ありがとうございます」

ヤコブさんはロザリーにギルドの仕事をあれこれ指示してから、私を案内してくれた。でも、すぐ裏口に回されて、あれ？と思う。

「ギルドの建物は四階建てで、二階までは冒険者達の食堂やら仕事斡旋の受付やらがある」それは私もお世話になってるから知っている。

「三階が俺達の事務所なんだ。で、四階は寮として使っていたわけだが、私的な空間を確保するために他の階とは繋がらない設計になっていて、この裏口から直接階段で行くんだ」

ヤコブさんは、シンプルな裏口の横に設けられた円マークに、石版を押しつけた。ピツと軽い音がして、スーッと裏口が開く。

「四階まで歩いて上るのは難儀だけど、それくらいは苦じゃないだろう？冒険者なら」

「はい、それくらいは大丈夫です！」

簡素な階段を上っていくと、比較的広いフロアにたどり着いた。廊下を挟んで北側と南側に同じ作りの部屋が二つある。

南向きの部屋は大通りに面しており、扉を開けると、そこには何も物がなかった。

中で二つに分かれていて、手前の部屋には簡易な台所やトイレがある。古くはなっているけれど、以前の入居者が丁寧な使い方をしていたのか清潔だった。

奥の部屋はその部屋の二倍の広さがあったて、一方の壁には大きな窓がある。

「あ、ベランダもある！」

そのベランダに出て、身を乗り出してみたら……

「わあ……、綺麗！」

私の目に飛び込んできたのは、パステルカラーの屋根の波、だった。

この街の建物は、高くても三階くらいまでのものが多い。ここは四階建てで、しかも各フロアの天井が普通の建物より高いので、視界を邪魔する物もなく、この街を一望できた。

私はすっかり観光客気分です、街を隅から隅まで見渡す。

色とりどりの屋根。整備された舗道。忙しく働く人達。

新しく生活を始めるのに、アンガスの街はとてもいい場所です、さらにこの部屋も新生活には最適だと思われた。

「わあ！あれ、飛竜じゃないですか？」

「お！そうみたいだな。こんな街までドラゴンが来るとは珍しい！」

私は南の空を旋回する二頭のドラゴンを指さしてはしゃいだ。

ドラゴンは貴重な動物だから、よほどの金持ちか貴族しか所有してないと思う。そのうちの二頭が羽ばたきを止めてこちらを見た気がするけど、きっと私の勘違いだろう。頭が羽ばたきを止めたけれど、さすがに子供っぽいかなあと思ってやめた。

二頭はゆっくりと旋回して、街の真ん中に位置する塔の下へと降りていく。

「この街の領主屋敷に降りたな。あのドラゴンは、領主殿の持ち物なのかも」

「あれが領主のお屋敷なんですね」

感心する私に、隣に並んだヤコブさんが聞いてきた。

「領主の屋敷ほどではないけど、ここもなかなかいい物件だろう、どうする？」

悪くない。けれど。

「ちよーっと、お高いかなあって」

多少、予算オーバーかもしれないと唸った私に、ヤコブさんは片目をつぶってみせた。

「朝晩、ご飯付きでも？」

「え！ 本当ですか!? それだと逆に安すぎませんか？」

「いいんだよ、職員への福利厚生なんだから」

んん？

意味をはかりかねて、私は眉を寄せる。

「ヤコブさん、私はギルドの職員じゃありませんよ？」

「じゃあ、職員になるのはどうかな？ 別にずっと、ってわけじゃない。半年の間、非常勤で勤めてくれればいいよ。無理強いはいしないけど、たまに冒険者の治療なんかしてもらえたら助かるわな」

なるほど、それが狙いか。

考え込んだ私にヤコブさんはニヤリと笑う。

「別途何かを依頼するときは、もちろん規定の依頼料を払う。あ、それからこの部屋なんだけど、どうしても急ぎで三階に下りたいときは」

ヤコブさんはベランダの横を指さす。気づかなかったけれど、折りたたまれた梯子はしごがあつて、そ

れをまっすぐ下ろすと、余裕で三階のテラスに届く。

「こんな風に三階へ行くのをショートカットできる」

「べ、便利……！」

「プライベートを重視したいなら梯子はしごは折りたたんだままでいいし、気にしないなら梯子はしごは伸ばしっぱなしにして、三階の俺達と仲よくやってもいい」

「ううう」

「ちなみに、ご飯は三階の従業員室へ運んでくるよ。一緒に食べよう！」

「うああ」

ヤコブさんは満面の笑みで両手を広げ、私は頭を抱えて苦悩する。

まさに理想の生活だ。広いフロアを独り占め。素敵な景色。ご飯も出る！ ギルドの真上だから防犯も問題ない！

私は意を決して……ヤコブさんに両手を差し出す。

「ヤコブさん！」

「うん？」

「ちゃんと読むので、契約書を下さい」

ヤコブさんはズルっとこけるふりをしてから、苦笑した。

「そうだな、契約書に目を通すのは大事だな」

「すいません。どうしても、自分の目で全部確かめないと気が済まなくて」

「用心深いのはいいことだよ」

ヤコブさんは笑い、三階の事務所まで私を連れていってくれた。

その日は宿屋で一晩、賃貸の契約書と雇用契約書を読んで……私はギルドの四階に住むことにした。

新生活の始まりって、何だかワクワクしてくるな！

「……美味っしい〜！」

朝。私は焼きたてのパンを頬張って、その味を噛み締めた。

ホワホワの白パンの表面に、テーブルの上にくつも置かれた瓶から散々迷って選んだ、イチジクのジャムをつける。そして再び頬張れば……

あ、控えめな甘さで美味しいよお！

「パンのおかわりはたくさんありますから、どうぞ遠慮なく」

「ありがとうございます！」

ギルドのお世話になると決めてから数日が過ぎ、私はとりあえず寝具だけをロザリーに手配してもらって、新生活を始めていた。

ギルドの職員さんは、一階の食堂の人達も合わせて二十人前後。

定休日はないので、朝の八時から夜の九時までシフト制で働いている。また、緊急時に備えた夜勤の人もいて、私にパンを出してくれたのは夜勤明けの職員さんだった。

食堂は昼前からの営業だけど、仕込みのために朝から出ている料理人さんもいる。

彼らが作ってくれる朝食を三階まで人数分運んで、夜勤明けの人達とテーブルを囲むのが、ギルドで暮らし始めてから最初にできた習慣だった。

ギルドに住むのはプライバシーが、とか最初は渋っていたけれど、他の人とはほとんど顔を合わせない。とはいえ人の気配がないと、それはそれで寂しいので、三階と四階の間の梯子はかけっぱなしにして、そこから出入りさせてもらっていた。

一人は気楽だし、一人暮らしを満喫したい！と思っていたけれど、元々施設の大部屋育ちだし、旅もずっとしてきたし、今世の私はにぎやかな環境が好きみたい。

朝食と夕食付き、おまけに絶景と楽しい会話付きという、何とも恵まれた環境にいる。

あー、幸せ！と私は二個目のパンを手にして、葉物野菜とチーズを挟んだ。そこにイチジクを切つてのせて、かぶりつく。美味しいっ……

つい先日までの怒涛のような朝を思い出す。宿屋に泊まるときはいいけれど、冒険者だから野宿をするときもある。炊事全般は私の担当だった。

シャルルは全く炊事をしないし、アデルとサイオンはそもそも朝は起きてこない。

フェリシアは手伝ってくれようとしたけれど、あの完璧に見える美魔女は、料理が壊滅的に下手なのだ。だから彼女には、後片付けだけ手伝ってもらっていた。

早くに起きて、下拵えして、全員分の朝食を準備して。

『このパン、何だか硬いな……』